『文久写本狂言集』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻 八

狂言研究会

愛知県立大学附属図書館の貴重書の中に『文久写本狂言集』半紙本十五冊がある。文久元年（一八六一）から文久二年（一八六二）にかけて書写されたもので、写しとしてはさ程古くはないが、狂言台本として八十四曲を収めるほか餅酒などの小舞も書きとどめている。内容を調査すると、「是ハ此隣の者て御座る」（心奪ほか）のように「あたり」を「隣」の字を用いて記す鷺仁右衛門派の特徴を持ち、台本としては『鷺賢通本』に酷似するものであることが判明した。したがって、『日本古典全書　狂言集』上中下（朝日新聞社）に収められた狂言の原態を示しているかと思われ、また古典全書に収められなかった曲も少なからずこの『文久写本狂言集』に収録されて、四十余曲に及ぶので、ここに翻刻することによって、『鷺賢通本』の補強に一役を担うことが期待されるものである。

以下に所収曲を載せ、『日本古典全書　狂言集』にないものには○印を付した。

① 心奪　止動方角　二人袴　伊呂波　○花争　○氏結
② ○骨皮　○宝の瘤取　○菊水祖父　井礑　名取川
③ ○棒縛　○文荷　鱸包丁　連歌盗人　○人歟杭歟
④ ○苞山伏　○鬼の小槌　三人片輪　昆布売
⑤ ○飛越　福の神　瓜盗人　萩大名　○薩摩守
⑥ ○文相撲　○鼻取相撲　○鳴神　○地蔵舞　二千石
　○文蔵
⑦ 柿山伏　鈍太郎　伯養　○悪太郎　茶壺
⑧ 抜空　伯母が酒　しひり　墨塗り　○空腕
⑨ 膏薬煉　○鶏聟　狐塚　○栄螺　○土筆
⑩ ○酢辛　○吃り　○鏡男　犬山伏　○太刀奪
⑪ ○小舞（餅酒、雁厂金、同、弓矢立会、三人夫、鶴

亀、若松、勝栗、松楪、土車、七ツ成子、宝の瘤取、掛川、泰山府君、宇治の晒、暁明星、最物細、京土産、小山伏、十七八、末の松山、雪山、福の神、先文、あの山、海道下、石引、番匠屋、鎌倉女郎、春雨、杉の木、住吉、鵜飼、善界、八島、加茂、笠之段、玉之段、山姥、鞍馬天狗、景清、猩、蝉丸、放下僧、道明寺、紅葉狩）

○物真似　寝音曲　○早漆　伊文字　腰祈　○呼声

素袍落

⑫ 末広加利　○柑子　○不聞座頭　○磁石　文山立

○呂蓮　餅酒　恵比須毘沙門

⑬ ○鎌腹　○内沙汰　合柿　○鬼ノまゝ子　○仁王

⑭ 塗師　米市　八句連歌　栗焼　花盗人

⑮ 八幡の前　○鐘の音　○惣八　千鳥　○仏師

布施無経　○縄なひ　○歌仙

今回は「あいち国文第7号」に掲載した『文久写本狂言集』翻刻七につづくものである。

凡例

一、底本は『文久写本狂言集』（愛知県立大学附属図書館蔵の貴重書）である。

一、底本は当て字の非常に多いものであるが、できる限り忠実に翻刻することを原則とした。但し、読解の便と印字の煩雑さを避けて以下のような処理を施した。

1 漢字は現在通行の字体に統一した。異体字・略体字なども原則として通行のものにした。

（支→事　凉→涼　臺→台　嬉→嬉　迚→迄など）

但し、哥・躰・坐はそのままとした。

2 台詞は平仮名、ト書は片仮名を原則としているが、台詞中の助詞に使用の多いハニトノなどはそのままとした。

3 「・〆・〆・㐂・㐂・㐂・ゟなどの合字は開いて、それぞれコト・シメ・シテ・トキ・トモ・よりとした。

4 句読点も底本のままとした。台詞の変り目にいくらかの空白を設けているが、適宜判断して句切りに一字分空ける処理をした。

5 誤記と判断し得る場合も修正せず（ママ）と傍記した。

6 謡の部分に付されたゴマ点は省略した。

〔鬼のまゝ子〕

鬼継子　紅猪口白粉ヲ香箱入鏡布袋ニ入頂人形ヲイタキ出ル

童ハ此隣の者て御座る　久〻親里へ参らぬに仍見廻に参ふと思ひ升る先そろり〳〵と参ふ久〻て参れは道を聢は覚ませぬ遠路て御座れは道の程も心許なふ御座る乍去此道を参たならは隠れハ有廻と思ひ升る辞是ハ殊の外広野へ参たか何とした所

しや知らぬやあ〳〵播磨の稲南野しやはて扨何とやら
淋敷気味の悪ひ野て御座る其上俄物凄う成て
御座るが気味の悪ひ事て御座る　ト云乍橋掛へ行トシテ幕ヨリ竹杖付首引ノ如ニシテ出ル
出喰ふ〳〵〳〵　喃悲しやの真平命を助て下さり
ませひ悲しやの〳〵　ト云乍女大臣柱ノ方へ行下ニカヽム居スシテ舞台へ追掛出テ　やいそな（ママ）
奴己ハ何者なれハ人物はなれた所へ来たぞ　私ハ此
隣の者て御座るか親里へ参り升る　今仮何方へも
行け此間ハ久敷生物を喰ぬ程に天窓からたつた一か
みにせふ出喰ふア、〳〵〳〵〳〵　真平命を助て被下ませ
い　やい汝か前に抱て居るハ何しや　是ハ童か子て御坐る
扨も〳〵可愛子しややい〳〵してそちハ夫か有か（ヲット）
夫かなふて此子か有物て御座るか　是ハ某か誤た　して
此方にハ親子か御座るか　親かなふて某か生るゝ物か
此方の親御ならハ嘸恐ろしう御座ふ　辞ゝ某とハ違ふ
て心ハ佛しややいそち連て居て某か妻にするそ
此方と夫婦に成事ハいやて御座る　身供か言ふ事をそむい
たらハたつた一かみにせふ出喰ふ〳〵ア、〳〵〳〵　ア、
夫ならハ
成升う　何しや成ふ　是非に及ませぬ此子の為て
御座る程に成升う　乍去化粧ヲ致て参升う　辞ゝ和御侶の
顔か美敷（ウツクシイ）に仍化粧
にハ及ぬよ　辞ゝ祝言て御座るに仍ちよつと致升う
夫ならハとも角もてをりやる　其間此子を守をして
被下い　ヲヽ守をせふこちへおこさしませ　ト云子ヲ渡ス袋カヽミヲ出シ白粉ヲ付
やれ〳〵可愛子しや母か美しひに依て能ふ似たイヤコソ
〳〵〳〵笑　はあ　ト云テヲトス　申ゝ其様にをどさせらるゝな
辞ゝ泣事てハないイヤコソ〳〵〳〵笑やかいを作ハ機嫌か
わるふ成たイヤコソ〳〵〳〵ハア機嫌が直た　辞和御侶に
言渡す事か有ル今からハ某の子じや程に身共に能ふ
似て如何にもたくましうそたつて扨成人して人○
さしませ先言渡す事ハ如此しや扨化粧ハまたさしませ
ぬか　申ゝ最早能ふ御座り升る　ト道具ヲ袋ニ入テ立　扨目出度ひ
折柄なれは囃物て蓬莱の嶋江祈ふと思ふか何とをり
やろふそ　一段と能ふ御座り升うして夫ハ何と囃子事
て御座る　別の事ても無此通りを真直に囃ふ　何とて
御座る　鬼か継子を肩に乗せて蓬莱の嶋へ参ふと
囃ふ　心得升た急て囃させられい　シテ女ノツテ云鬼の継子を
肩に乗せて　乗せて　乗せて蓬莱の嶋へ参ふ嶋へ帰ふ
〳〵〳〵　右ニシヘン囃子四廻リ二人テ囃子　子ヲ肩ニ上テ　某ハ草臥た和御侶へをまそふ
童か抱ませう　さあ〳〵囃させられい　心得た
二人　鬼の継子を母に抱せて父かあいして蓬莱の嶋へ帰ふ
嶋へ帰ふ〳〵〳〵　女子ヲ肩ニ上テナンヘンモ云段ヽ廻リテ女橋掛へアトスサリニ行シテ舞台ニテ囃子　申ゝ
鬼殿其方ハ夫に緩りと御座れ童ハ親里へ帰るそ喃ゝ
悲しやの〳〵　ト云テ逃入　やい〳〵あの大着者とちへ行
そ人（タレ）ハないかとらへて呉ひ出喰ふ〳〵〳〵　ト云テ追込

（山下茜）

〔仁王〕

仁王

是ハ此隣の者て御座ル某身の上不如意に御座つて渡世営ミか成にくふ御座ルに依て先他国致て見うと存て罷出た夫ニ付て爰に別て御心易ふお目を掛させられて被下るゝお方か御座る程に御暇乞乍是へ立寄て参り若亦能御思案も御座らハ御差図に任セ当所ニ足を止(トヽ)うと存ル先急て参ふ何卒お宿に御坐れハ能ふ御坐るか常〻御隙なして御坐るに仍てヶ様に態〳〵参つても自然お留守なれハ如何て御坐る哀お宿て御坐つて被下い

かしと存ル辞参程に則是しや物も案内もふ　辞表に物申と有案内とハ誰そ物申とハ　私て御坐る　イヤ誰能社おりやつた

(シテ)此間ハ久〻御見廻も申ませぬかお替り被成ゝ事も御坐りませぬか

中〻替る事も無して其方ハ旅立の躰しやか何方へ行し升そ去ハ其御事て御坐り升ル此方へ申上るも近頃恥敷ウ御坐れ共殊の外

身上不如意に罷成升て最早(ハヤ)当所の住居も成ませぬに仍(ヨツテ)他国をも致ふと存てお暇乞に伺公致升て御坐る只今迄ハ何かとお目を懸させられて被下て忝ふ存升ル　はて扨夫ハ気毒な事ておりやる

他国をせす共一持かせひて見る様な分別ハおり無か　辞申方〻

もふさけ升たに仍何方も無心申ふ方も御坐りませぬ　して又他国をすれ(ス)ハ元付事もおりやるか　辞左様の事も御坐りませぬ

か不斗思付升て御坐る　はて扨其方ハ無分別な人しや心当りも

無て他国をすると云事か有物ておりやるか　はあ　某の聞て聞

捨にハならぬか何卒しておませ度物しやか　能様に御分別被成て被下ませひ　喃〻能事を思ひ出た和御侶ハ物真似抔ハならぬか　物に仍真似升うか何の真似を致ス事て御坐る

仁王の真似ハならぬか(ルマイカ)　あの樓門に立せられた仁王の真似て御坐るか　中〻(シテ)少考是ハ幸隣近ひ樓門に仁王か御坐つて見覚て居り升ルに依二王の真似ならハ致ませう　夫ならハ能事か有る其方を仁王の躰ニ拵へて扨当所の上野へ新な仁王か降られた程に何れも参らせられいと解たならハ定而参詣か数多有ふ　是ハ左様て御坐り升う　其さん物を以て元附様にしたならハよからふか是ハ何とおりやるそ　是ハ能事

を思召出されて忝ふ御坐り升ル夫ならハ左様に成されて被下

ませい　其儀ならハ是へをりやれ仁王の躰ニ拵てをまそふ
心得て御坐る　先頭巾着差ませ　心得升た　肩をぬか
しませ　心得て御座る何と能御坐り升ルか　大方出来ており
やるいさ上野へ同道致ふさあ〳〵おりやれ〳〵　心得て御
坐る
辞申ヶ様に何角を世話を被成て被下るゝ様な大慶な事ハ
御座りませぬ　言迄ハなけれとも随分見顕されぬ様にさ
しませ　其段ハお気遣ひ被成まするな見顕ハさるゝ様
な事ハ御座りませぬ　辞何角と言内に是ハ早上野へ参つ
たとこ元か能おりやろふそ　去ハとこ元か能御坐り升うそ
辞爰元かよかろふ先是へ寄て二王の躰を差ませ
心得て御坐る　喃〻其儘の仁王ておりやる某ハふりやう程
に参詣を待しませ　心得ました　やあ〳〵皆〳〵聞せ
られ当所の上野へ新に仁王の降らせられた程に近の輩
皆〻参らせられいや　立頭何れも御座るか　皆是に居升る
頭当所の上野へ新に仁王の降らせられ(ママ)と申か何れも聞せられ
て御坐る　皆中〻承て御坐る　夫ならハ参詣致升う　能御坐
らふ　さあ〳〵御坐れ〳〵　心得て御坐る　二王の降ら
せらるゝと申ハ珍敷事て御座る　仰らるゝ通是ハ不思儀な
事て　辞何かと申内に是ハ上野へ参つて御坐る扨とこ元に
立せら
れて御座るそ　立衆去ハとこ元に立せられて御坐るそ　頭辞
申〻是
に立せられて御坐る　立衆疑も無是て御坐る　頭いさ拝み升う
能御坐う(ウ)　先さい銭を上させられい　皆〻心得升た　頭弥息才
延命ニ守らせ給へ　皆〻福貴繁昌守らせ給へ　頭私ハ力を授
させら
れて被下い　此刀を寄進ニ上まする　立衆私ハ是を上升る
立頭扨も〳〵新な仁王てハ御坐らぬか　立衆実と新な二王て
御坐る
頭いさ下向致升う　皆能御坐ふ　頭何れも此由を申て参詣
致さるゝ
様に申升う　皆一段と能ふ御坐り升う　さあ〳〵御坐れ〳〵
心得て御坐る　シ喃〻嬉しやの〳〵是ハ夥敷さん物て御坐る
先急て持参て弘め升ふ申〻御坐り升るか　アト何事ており
やる
何と参詣ハおりやつたか　シ辞申夥敷参詣て御坐而(テ)鳥目
の事ハ申に不及此様な物迄寄進被致て御坐る　はて扨夫ハ
仕合な事じや夫を持て元附様に差ませ　何か扨元附様に
致升う先是を此方へ預升う　中〻某の預ふ　扨申私
ハ今一度参度ふ御座り升ル　辞〻最早いらぬ物て御坐る
お気遣ひ被成升ルな見顕さるゝ事てハ御坐り升ぬ程に
今一度遣されて被下ませひ　夫程に思わし升ならハ如何
様とも差ませ　夫ハ近頃忝ふ存升ル　今度ハ独銀を貸
ておまそふ　夫ハ一入忝ふ御座る　アト是を貸ておまそふ
程に

必〻見顕されぬ様にさしませ　何か扨御気遣被成升ルな
随分見顕さるゝ事てハ御座りませぬ　早ふ行しませ　心得
て御坐る扨も〳〵有難事て御座る急て参ふ能イ御思案の被成
て被下てヶ様の仕合な事ハ御座らぬ辞早上野へ参つた今
度ハあんの二王を致ふ何と参詣ハ無か知らぬ辞あれへ参
詣か見ゆる　後の立衆何れも御坐るか　皆〻是に居升ル　当所
の上野
へ新な二王の降せられたと申程に参詣致ふと存るか何と御
座ふそ
皆〻一段と能ふ御座ふ御供致ふ　立夫ならハいさ参り升ふさ
あ〳〵
御座れ〳〵　皆〻心得て御座る　立何と是ハ不思儀な事て御
坐ら
ぬか　皆〻仰らるゝ通不思儀な事て御座る　立辞何かと申内に
是ハ上野て御座る　皆実と上野て御坐る　立何方に降らせら
れて御座るそ　皆去れハ何方に降らせられて御坐るそ　立則是
て御坐る　皆〻誠に是に立せられて御さる　立いさ拝み升う
皆能御坐ふ　立先さい銭を上させられい　皆〻心得ました　立さ
あ〳〵拝せら
れい　皆〻心得升た　立弥福徳自在に守らせ給へ　皆〻武運長久
に守らせ給へ　立次申〻殊の外殊勝な事て御坐る　皆〻其通
て御坐る
立左なから正身の人の様に御坐る　皆〻其通て御坐る　立申
是へ
御坐れ　何事て御さる　何と思召そ目の内を見升れハ
玉眼かうこく様に御さるか何れもにハお気か付せられませ
ぬか　実と被仰るゝ通御くしもうこく様に御坐るはて扨是
ハ合点
の行ぬ事て御さる　其通りて御さる　ヶ様の事ニハまいす
か有物て御坐る程に誠か偽か少トこそくつて見升うか何と
何と御坐らふそ　是ハ一段能御坐ふ　さあ〳〵是へ寄せら
れい　心得升た
是ハ殊勝に能出来させられ御坐る　其通て御坐る　何とや
らみくしかうこく
やうに御坐る　其上玉眼も動き升る　左なから人の様に御
坐る　こそ〳〵
〳〵〳〵　やいあの大着者　面目も御坐らぬ　人たらしと
ちへ
行そ人ハ無かとらへて呉ひ　真平免て呉い〳〵　やる廻そ
〳〵

（小谷成子）

〔塗師〕

塗師

是ハ此屋の主ニて候童か連合ハ塗師細工を致れ升ル夫ニ

付て都にお師匠の御座るか近年手前不如意に御座るに付て
当所へ下ふと此程文を被下て御座るか爰元ニ逗留致れてハ
迷惑に御座るに依何と致さるゝと申せハ若参られたらハ
他行致たと云て置けと申さるれ共仕儀に仍てハもたし難イ
事も御座る程に兎角童か思案を致よい様に申ふと思ひ
升る　是ハ洛中に住居致ス塗師て御座ル某随分渡世に
精を出て御坐れ共段〻次第に衰へ最早此頃ハ別て不如意に
御坐て当所の住居も成難さのまゝケ様に様を変て御坐る
夫に
付越前の比の庄に弟子を持て御坐るか是も初メハ不勝手ニ
御坐
たれ共近年仕合を致て手前を取直たと申に依て先達て文
を下して御坐る程に是へ罷下り相続を致ふと存て罷出た先
そろり〳〵と参ふ　某ハ若イ時分東国西国辺へハ参た事も
御坐れ
北国江ハ今か初て御坐る程に路次の程か心許なふ御坐る乍
去尋
もつて参たならハ知れぬ事ハ御坐る廻イ辞何かと申内に殊
の外
賑な所へ参て御坐る　やあ〳〵何と言そ越前の北の庄じや
はて
扨是ハ幸な所へ参合た先此町筋を参つて尋ませう　塗師
の家居ハ表から知るゝ物て御坐る辞はや是そふに御坐る先
案内
を乞て見升う物も案内もウ　物申とハ殿方て御坐り升る
平六殿の宿ハ是て御坐るか　中〻是て御坐る是ハ見馴ぬ御方
て御坐るかとれから出させられて御坐る　某ハ都方の者て
御坐るか此
間文を下し升たか届升て御坐るか　中〻届升て御坐るそふ
仰らるゝハ都のお師匠様て御座り升るか　其通ておりやる
何と
平六殿ハ息才ており升るか　去ハ其お事て御座り升ル此方
よりお文
の届升ル四五日以前平六殿ハ果られ升て御坐るよ　やあ〳〵
平六ハ
果とをしやるか　中〻果られ升て御坐る　はて扨夫ハにか
〳〵
敷事て御坐る某今一度逢ふと存て折角参つて御坐るに近比残
多い事を致て御坐る　童か心を御推量被成て被下ませい
成程
御尤て御坐る某も弟子多中にも平六ハ久〻の名馴なれハ別而
不便に思ひ升る　是ハ御尤て御坐り升る　余り残念に御坐る
程に今宵ハ是に逗留致シ終夜跡を弔ひ升う　夫ハ有
難御志て御坐る　号通らせられて緩とお休被成ませい　心
得て
御坐る　まんまと申なして御坐るこちの人此由を申ふ申〻

平六
殿〳〵　是ハ何をして御坐り升るそこちの人〳〵　シテは
て扨かし
ましい何事ておりるそ（ママ）　辞都のお師匠の御坐り升たよ
はて扨和御侶ハなせに留守じやとハ云ひで　辞此方ハ世に
無キ
人しやと申升た　やあ〳〵果たと云ウた　中〻　やあらそ
ちハ
理不尽な事を云物じや云事と言ぬ事か有是程息才て居る
者を死た云ふそちかさふ云ふも推量した外に心か有に仍而
某を咒咀と云へたよ　はて扨此方にハつかも無事を仰ら
るゝ
其様な事てハ御坐りませぬお師匠の此所に自然逗留致され
てハ此方の為に成升ぬに仍而其様に申て御坐るに其様な事
を
云せらるゝかひの〳〵　夫ならハ能おりやる　乍去お師匠
の遥〻
わせたに不逢に戻すと云も天命の程か恐敷今一度お目に懸
り度物しやか何とせうそ　去ハ何と被成たならハ能御坐り
升うそ
辞思ひ出た事か有方便（タハカリ）事てハ有れ共兎角あれ出てお目に懸
らすハ成廻イ程に是非に及ぬ平六か幽霊しやと云てお目に
懸ふか
いやい　是ハ能御思案て御坐る左様に被成ませい　夫なら
ハ某ハ
拵て出ふ程に其方ハあそこを能様にくろめて呉い　夫ハ
お気遣被成升ルな早ふ拵て御坐りませひ　心得ておりやる
扨も〳〵嬉敷事哉童ハ能分別を致て今の様に申ないて
御坐るこちの人の云るゝ様に他行致たと申たならハ帰る迄
待て
居よふ抔と被申た時夫も成廻とつれなふも被申廻し若此所
に逗留被致てハ細工の上手の事を聞及方〻からあつらへに
参つ
たならハ手前ハ不如意に成つて又古へ（イニシヘ）のことくとほしう成
升うに
返〳〵も童か能事をして此様な嬉敷事ハ御坐らぬ辞由ない
独言を申た先あれへ参り升う何とお休被成升て御座るか
中〻緩と休升て御座る　少トお茶ても上りませぬか
辞給升廻　最早初夜の時分て御坐る程勤を初メ升う
此方にも夫へ寄て念仏を申させられい　心得升て御坐る
アト旅人ハ鉦皷を鳴らし女房と念仏申平六かなす陰いさ
や弔ハン〳〵（ト是ヨリ打流）　シテ　一セイ有難や法のうるしのゑにしあれハ
二度閻浮に帰るなりけり　アト不思儀やな平六か姿陰
のことくに見へ給ふハ　詞念仏の功力の有難や　シテ　詞我平
六か幽霊成るか御弔の有難さに是迄顕出たるなり
都にて見し時よりも衰へはつる無慙さよ　シテ昔

ハ花ハ漆今ハ年たけ蝋色の　漆（アト）の罰もあたり
たる　職（イロ）の有様懺悔せよ　出（シテ）て〳〵さらハ語り申
んと　恥かしなから餓鬼道の　塗師（地）と成つて青漆の
如くなる　淵にのそんて漆こしに水を入て呑んとす
れは　程なく火焔と燃上て身は焼漆と成たるそや
〳〵　また有時（シテ）ハ布に巻れてねち木を入れてひた
ねちに　ねち詰らるれハあら心漆刷毛に化そこなハ、
如何ならんと風呂の木影に入りにけり　塗籠他行
と云事ハ〳〵此時よりこそ　初りけれ

（狩野一三）

〔米市〕

米市

是ハ此隣の者て御坐る一年の日数を程遠ひ様に存て
御坐るか最早今明日に押詰て御座る夫に付て毎定て合力
米を下さるゝお方か御坐るか今に沙汰の無ハ合点の行ぬ事
て御坐ル
か今日ハあれへ参り首尾か能ハ申請て参ふと存る先急て
参ふ誠に有徳のお方て御坐るに仍て某抔の不如意の事ハ
御存知（マヽ）らせられいで忘させられた物て御座ふ辞何角と申
内に是て御座る先此棒をハ爰元に置升う物申案内もう
お見廻申升る　辞表に物申と有誰も出ぬかやい案内とハ
誰そ物申とは　私て御坐り升る　辞誰よふ社おりやつた
何と近い正月に成ておりやるの　仰らるゝ通近い正月に成
升て御坐る定而最早お仕廻被成たて御坐り升う　おふ今迄
仕廻ぬ者か有ふか定而和御侶も仕廻てわせた物て有ふ　辞
申私の事て御坐れは仕廻たの仕廻ぬのと申事ては御坐ら
ぬ女共と口論を致て漸是迄逃て参て御坐る　夫ハ心
許無か如何様の事ておりやる　女共の申も尤て御座る当年
と申てもはや今明日に押詰たになせにうか〳〵として居る
そと
申升るに仍て宿にも居られませいて此方迄参り升て御坐る
是ハ女房衆の云るゝか尤しや夫ニ付て毎定て合力米を遣スか
夫ハまた遣さぬか　辞また被下ませぬ様に御坐る　夫ならハ
云付ておまそふ夫にお待やれ　夫ハ忝ふ存升る被仰付て
被下ませひ　やい〳〵何の誰方へ例年定て合力米を遣すを
何とて失念をしたそやあ〳〵しやあはて扨夫ハ気毒な
事しや喃〻おりやるか　是に居升る　其通を云たれは
最早蔵に注連飾をひつしりとしたに仍て出されぬと云ハ
はて扨夫ハ気毒な事て御坐り升ル午去大やけの私と申事
か御坐り升ルに仍て少しや抔無と申事は御坐り升廻迚の事今
一度問せられて被下ませひ　夫ならハ今一度問ウておまそふ
夫にお待やれ　夫ハ忝ふ存升ルやい〳〵少し成とも出たのハ
無かやあ〳〵しやあ夫ハ余少分な事しや辞喃〻尋たれハ半
石の又半分有ると云か夫てハ用に立廻　半石の又半分　中〻

夫ハ天清な事て御坐る私の事て御坐れハ三ヶ日祝升れハ済事て御坐る被仰付て被下ませひ　心得ておりやる　えいとう〳〵〳〵

申〳〵被仰付てハ被下ませひて御自身に忝ふ存升ルさらハ持見升う　さあ〳〵持て行しませ　如何な〳〵地離も致ませぬ何と致升うそ　何とそして持しませ　少ト待せられて被下ませい申〻此棒を不審に思召升うか是ハ路次て人の預物て御坐る是て荷ふて見升う一段と能からふ荷ふてお見やれ上れハ能ふ御坐るか如何な〳〵上る事てハ御坐りませぬ今一方に是程

御坐れハ持能ふ御坐るか是は片荷すりか致て持にくふ御坐る何と致た物て御座升うそ辞申〳〵能イ事が御座り升る幸あの俵ニ縄か

付て居升る程に背負ふて見升う　一段と能おりやらう

某の手伝ふておまそふ是ハ慮外て御座升ル　えい〳〵〳〵先すつしりと致て心能ふ御座り升ル　左右有ふとも　去ラハ御

暇申升ル　おりやらふか　中〻　去らハ〳〵　忝ふ御座る能ふおりやつた　ハア喃〻嬉敷哉の〳〵先合力米申請て御座る

乍去また失念被成た事か御座る毎定てうばか方へ着古へをたもるか是も失念を被成たと見へた去らぬ躰にて戻た物て御座らふか辞〻前例に成ハ如何に御座る立帰つて面白おかし

う申ないて見うと存ル申御座り升るか　誰しやそ　私て御座り升る　和御侶ハまた帰らぬか　帰ふと存て御座るか最前

失念を致た事か御座つて態〻立帰り升て御座ル　夫ハ如何様な事

ておりやる　別の事ても御座りませぬか女ともか方よりおごゝ様へ

御伝云を申升て御座る　先ハ何と云ふて御こひたそ　近ひ正月に成升て御座るか弥お替り被成るゝ事も御座りませぬか定而

正月のお小袖か結構に出来升たて御座り升う姥か事て御座れハ寒ふてこそ暮升ると申越まして御座ル　喃〻皆まておし

やるなまた失念した事か有る毎おこふか方より姥か方へ着古へを

遣をはたと失念しふ是(ママ)も云付ておまそふ　夫は忝ふ存升ル　是〻是を姥へ届てたもれ　是は結構なお小袖て

御座り升ル　扨是は何と致て持た物て御座り升うそ手に持て参るも時分柄の事御座れハ不用心て御座り升うす又此棒に掛て参るも何とやら売物を見る様て如何に御座る何と致た物て

御座ふそ　去れハ何とか能ふそ(カラ)　辞申此後の俵を隠す

為て御座る程に是へ掛て参り升う　是ハ一段能ふおりやらふ

某の掛ておまそふ　是ハ慮外て御座り升ル夫ならハ掛させら
れて被下い　心得ておりやる　何と能ふ御座り升るか　中〻
能ふおりやる辞喃さなから人を負ふた様な　やあ〳〵人を
負ふた様に御座るか　中〻　時分柄てハ御座り若人か其後に
負ふたハ殿方そと申て尋たならは何と申た物て御座らふ
夫ハ和御侶の気点の働て能様に答差ませ　夫ならハ能様
に答升う扨最早御暇申升ル　おりやらふか　中〻最早
余日も御座らぬに依明年ハ夫婦連て早〻御礼に伺公致升う
中〻礼を待そ　去らハ〳〵　忝ふ御座る　能ふおりやつた
ハア喃〻嬉敷の〳〵有徳なお方ハ格別な物て御座る何時御無
心を申ても叶させられて被下る故我等如きの者迄も楽〻
と年を越事て御座る誠に縁と申物てあのお方が御座らすハ
某ハ何と致ふそ惑レ迷致す事て御座る先急て罷帰り女共
に悦セふと存ル辞是ハ早歳暮の御礼に行るゝと見へて若
い衆か大勢見ゆるか何とも申さねハ能ふ御座るか　立衆頭何
れも
御座るか　立衆皆〻是に居り升ル　立頭例年の通歳暮の礼に参
り升う
一段と能ふ御座り升う　さあ〳〵御座れ〳〵　心得て御座る
立頭辞申あれへ殿方やら負ひ升て参り升ル　誠にとなたやら
負ふて参り升る　先詞を掛て見ませう　能ふ御座ふ
喃〻喃そこな人　やあ〳〵こちの事て御座るか　中〻
其後に負し升たハ殿方そ　やあ　其後に負まし
たハ殿方しやとの云事しや　此後に負ふたを　中〻
夫に少ト待せられい　頭心得た申〻いな事に詰ツて御座る　其
通て御座る　去ハ社尋たか何と申た物て御座ふそいや申様
か御座る喃〻最前の人御座るか　何事ておりやる　只今ハ
此後
に負ヒましたを殿方そとの御不審か　中〻　是ハ隠れも
無御方て御座る俵藤太の御娘に米市御料人のお里帰て御坐る
何とおしやるそ俵藤太の御娘子に米市御料人のお里帰しや
とおしやるか　中〻最早号参る　是〻先お待やれ
何事て御座るそ　あれに何れもお若衆の御座るか其通を
申ふ程に夫に待しませ　是ハ迷惑な事て御座る
申〻俵藤太のお娘御に米市御料人のお里帰りしやと申升ル
米市御料人ハ承り及ふた美人しやと申程に爰許て御目に
掛つた社幸なれ御盃を頂ふと存るか是ハ何と御座ふそ
是は一段と能ふ御座ふ先あれへいて尋て見ませふ　急て尋
させられい　心得ました　喃〻おりやるか　何事て御坐る
何れもお若衆の仰らるゝハ米市御料人ハ承り及ふた美人しや
けな御盃を頂キ度と仰らるゝ程に戴かせてくれ差ませ
やあ〳〵　何と仰らるゝ此御料人の御盃か戴度い　中〻
あの御料人のお盃か　笑　是ハお若衆のされ事て御座ふ
辞〻され事てはない真実ておりやる何卒能様に頼むそ
夫ならハ此方にも思召ても見させられいちこ若衆にこそ思差
の附差のと申事か御座ふか此日のめも御ろふしられぬ御料人

のお盃か何と成物て御座るそ是ハお若衆に能様に仰られて被下い　辞〻お若衆の事なれハ跡先の差別もなふ申さるゝ事しや程に其方の心入を以て戴せてたもれ　やあら爰人かお衆斗かと存すれハ其方迄かおとけ無事を仰らるゝ某を慥成者と思召ハこそ某人に預させらるゝに其様なうしろ冥ひ事か何と成物て御座る是ハ能様に言て被下い某ハ最早号参る　辞噛〻先お待やれ　何事て御座る　夫ならハ其通を何れもへ言ふ程に先待しませ　はて扨迷惑な事て御座る　申〻其通りを申て御坐れは戴する事ハならぬと申升る　はて扨此方ハ比興な事を仰らるゝ云掛つて云恥かかゝれぬ是非とも戴ふと仰られい　其通を申升う噛〻其通を云ウたれハ此隣て人に知られた物か云掛つて云恥ハかゝれぬいやても応ても戴ねは置ぬかていと戴かせ廻か

やあら其方は其様な人をとし構な事ハ云ぬ物て御坐る乍去某のケ様に申ても又御料人の何と思召をも存せぬ此上は窺ふて見て返事を致ふ　是ハ一段と能ふおりやらふ窺て呉さしませ　乍去つゝと人をく面を被成るゝ程にお若衆につと脇へ寄つて御坐る様に被仰い　其段な気遣ひさし升なお若衆に脇へ寄つて御坐る様云ふ程に何卒成様に頼むそ　心得て御座る　申〻窺ふて見うと申程に少ト待せられい　何卒お盃か成れハ能ふ御座るか　噛〻最前人御坐るか　何と成るか〳〵　是へ御坐れ　何と成か　辞申出すといなやかひを作ておむつかるに依て中〻お所へハ参らぬ御若衆に能様に云ふて被下い　やあら其方ハ最前成様におしやつたに依て御若衆へ其通りを云ふたれハ何れも悦ふて居らるゝに依今と成つて其様な事か云るゝ物か此上ハ腕づくて成とも戴ねは置ぬかていと戴かせ廻か　やあら其方ハ聞分も無事をおしやる某も如在なひ通を窺ふて見て迄おまるに何かおしやる其方衆ハ大勢成某ハ壱人しやと思ふておなふりやると見へた仮云此上ハ御料人のお盃を被成ふと有つても某の弓矢八幡か逃事てはならぬよ己は憎奴の其様な事を言たならハ目に物を見せ立ハ置ておつれ（ママ）　夫は誠か　誠じや　真実か　真実しや　一定か一定しや　いて己目に物を見するそ　某も負る事てハ無そ　申〻口こわを申に仍て押寄て参り升う　一段と能ふ御座ふ　先是ハ御座れ　心得て御座る　頭いさ押寄升う皆能ふ御座ふ　皆〻えいとふ〳〵　シテえいとう〳〵　えいとう〳〵

えい〳〵おふ笑　某にならふ物の物の様に　扨も〳〵腹の立事哉某の存るハ今度ハ一両人跡に残て御料の奪取升うが何と御座ふそ　是は一段と能ふ御座ふ　夫ならは又押寄ませう　能ふ御座らふ　皆〻えいとう〳〵〳〵　シテえいとう〳〵

立衆頭申〻何れも是へ御座れ御料人を奪取て御坐る　皆〻心得て御坐る

頭御料人かと存たれハ俵て御坐る　其通て御座る笑是ハきやう
がつた物て御座る　シテ申〻是私の年取り物て御坐る　替〻やいあの
大着物　真平免て被下ひ〳〵〳〵　人ハなひかとちへ
行そとらへて呉ひやる舞そ〳〵〳〵

（加藤華）

〔八句連歌〕

八句連歌

シテ是ハ此隣の者て御座る。爰に別而お目を被下るゝお方か
御座るか。某急用の時分御無心申て御座れ共。手前不
勝手に御座るて今返済仕ませぬ。今日ハあれへ
参り責てお断なりとも申さふと存て罷出た。
先そろり〳〵と参ふ。今迄延引致さへ御座る
に有無のお断をも申上ねば。弥不届者に思召
れふ。心底の程がはづかしう御座る程に御機嫌を
見合。申延て見うと存る。いや則是しや。物もう
案内もふ　アトいや表に物申と有る。案内とハ誰
そ物もふとハ　シテ私て御坐りまする　アト是ハよふこそ
おりやつたのふ　シテ此間ハ久敷お見廻も申ませぬ
か御家内様にも御息才て御座りまするか
アト中〻とれも替る事もないよ　お子様方にも
御機嫌よふ御成長成さるゝて御坐りませう
成程随分無事ておりやる　シテ扨是ハ結構に御普請
か出来まして御さる。とれからとれ迄も御念か入ました
お手前者の成さるゝハ又是て御座る。お物入にお構
ひもなふ奇麗なお作事で御座りまする
わこりよハ普請か出来て初ておりやるか　アト中〻初で
御座る　如何様久しう見なんた。又表に座敷を拵へ
た。見せふ程にお通りやれ　シテ畏て御座る是ハ〳〵
よいお住居で御坐る。御作事かお上手て御座る。此違
棚のしほらしさ。通り棚の成され様。とれからとれ
迄も申さふ様もないお物数寄御坐る。いや爰な
文台に懐紙か御坐るが。定てお移徒のお連
哥て御座りませう　アト其様な物しや。又庭をも
しつろうふた程に見せふ　シテ夫ハ忝ふ御座る
アトざら〳〵〳〵　シテ扨も〳〵奇麗な事哉。遠山の
躰。泉水のお取合と申。いや殊に是ハ花盛りて御
座りまする　アト中〻今か盛ておりやる　シテ御庭前で
花見を被成るゝと申ハお浦山敷イ事て御座りまする
アト扨最前そなたハ懐紙に心を付たハ心憎イ扨ハ連
哥を召るゝと見へた　シテいや連歌と申程の事てハ御ざ
りませぬ。此以前前句づけの様な事を致ました迄で
御座る　アト夫ハ定てひけておりやらふ。幸今日ハ某

も隙でいる程に。云捨たそなたと両吟を致そふ
シテお相手に成りまする様な仕手てハ御坐りませね共。お
淋しうお暮成されませふならハ。お伽にわけもない
事を申て見ませう　アト迚の事に表八句致ふ程
に。わこりよ発句をさしませ　シテいや此方御発句
を成されませい　アトいや〳〵客発句に亭主脇と云
う事か有る程に。先そなた案して見さしませ
シテ夫ならハ御意次第に仕りませふ。何と致ませふそ
アト去れば何とがよからふそ　シテ幸お庭の花が盛りで
御座るに依て。花によそへて申ませふ　アト能うおりやらふ
シテ号も御坐りませうか　早いよ　アト花盛り御免
あれかし松の風　アト面白ふおりやるさりなから
是にハ少トさし合かおりやる　シテいや発句に差合
ハ無筈て御座る　アト尤発句に差合ハなけれ
共。此御免あれかしが差合でおりやる　シテ私ハ此御
免あれかしで持せた句て御座る　アト尤ており
やる。号も有ふか　シテお早ふ御座る　アト桜になせや
雨のうき雲　シテ扨も〳〵こをふ成りまし
て御座る慮外な申事てハ御座れ共。桜になせ
やを。なすなとお直し成されたならハ猶御句
かよふ御座りませう　アトいや〳〵某ハ桜になせや
で持たせた句ておりやる　シテで御座りまするか
中さ第三を召されい　シテ畏て御座るいく度も霞
にわひん月の暮　アトいや噺是ハわひぬと直さし
ませ　シテ私ハわひんでもたせた句て御座る
アト尤しや四句目を致ふ。こい責かくる入相の鐘
シテ是ハせわしう成まして御座る。ちと和らけて
申ませう。鶏もしはし心を延て啼ケ　アトいや〳〵
其様にのふる事ハならぬよ　シテ今のハ句て御
座る　アト人目ゆるさぬ恋の関守　シテ名の立に使
なつけそ忍ひ妻　アトやあら其方ハ聞ぬ人じや
いつ名の立程使をやつた事かあるそ　シテ夫ハ此方
のお心の付させられ様かわるふ御座る。前句ハ恋て
御座る惣して恋にハ。中立の使のと申かなふてハ
叶ハぬ物て御座るに依。其中立に使なつけそ忍ひ妻で
御さる　アト夫なれハ尤じや。日外あの仁に取替た物か御座る
か。唯今の句ハ皆下心て付られた。余り心底の程かやさ
しう御座る程に免てやらふと存る。噺さ今の句は
何とておりやるそ　シテ名のたつに。使なつけそ忍ひ
妻　アト余りしたへハ文をこそやれ　シテ是ハ何ンて御座る
アト先明て見さしませ　シテ是ハ私のかたより遣わ
しました借状で御座るが。何と致た事
で御座る　アト中さ借状でおりやるか。今の連歌の褒
美におまするそ　シテ是ハ却て迷惑に御座る。今迄
延引致すさへ気の毒に御座る。是ハ先夫へ置せられ
て被下ませい　アトいや〳〵時宜をせすとも下心か有

つて遣ハす程に平におとりやれ　シテお断をしせ
ば却て慮外に御座る程にいたゝきませう御恩の上の御恩
ハ忘れ置ませぬ。扨私ハ最早お暇申しませふ
アトおりやるか。又重て隙な時分ハ呼に遣ハそふ程に。来て
相手をさしませ　シテ中〻何時成とも参りませふ最早
号参りまする　アトおりやらふか　シテ中〻　二人さらハ〳〵
アトよふおりやつた　シテはあ　扨も〳〵夢の覚
たよふなこゝちか致す是と申も常〻連
歌の道を心掛る故和哥三神の御納受と
存る間此歓に目出度ふ謡ふて帰らふ
やさしの人のこゝろや。いつなれぬ花の姿の色
あらハれて此殿の。かり物をゆるさるゝ。たくひ
なの人の心也。詞是か有故朝夕くよ〳〵といく
世の思ひをいたひた。最早心も広ふなつたあら
心易やの

（野崎典子）